

# 樺太に移住 旧ソ連が占領 結婚しウクライナへ ロシアが攻撃

第二次大戦末、旧ソ連に占領されたロシア・サハリン州（樺太）南部で育ち、現在はウクライナに住む日本人男性が、ロシア軍の侵攻を受け、家族とともに隣国ポーランドに避難した。男性らは18日、祖国である日本に向かう。2回の戦争で人生を変えられた男性は今、何を思うのか。

## 日本人男性 帰国へ



3年前に亡くなり、今は1人暮らしだ。

今年2月24日、「起こらないと信じていた」ロシア軍の侵攻が始まった。降旗さんが住む西部ジトミルも頻りにミサイル攻撃を受けた。「軍事拠点だけを狙っている」というロシア軍の説明とは異なり、学校や民間人の住宅も爆撃された。「早く避難して」。降旗さんは日本に住むきょうだいに強く促された。

男性は降旗英捷さん（78）。長野県で生まれたが、父親の仕事の都合で当時、日本領だった樺太南部に移り住んだ。だが1945年8月、ソ連が日本に侵攻。樺太は占拠され、その後、ソ連領となった。幼かった降旗さんだが、今でもソ連兵が家上がり込み、「なぜ日本人が残っているのか」と威嚇した日のことを覚えていっているという。

樺太に残留した邦人は59年までに大部分が帰国した。だが降旗さんの父親には許可が出なかった。理由は不明だが、製紙工場で働いていた父親が有能だったため、ソ連が手放さなかったとみられている。降旗さんはレニングラード（現サンクトペテルブルク）工業大に進学後、ポーランド人の妻と結婚。71年、妻の姉がいる現在のウクライナに移り住んだ。その後、機械工として長年働いてきたという。99年以降、日本の市民団体の支援で降旗さんのきょうだい4人は北海道に永住帰国したが、降旗さんは妻の意向などを考慮し、現地にとどまった。妻は約

18〜60歳の男性は出国禁止だ。そのため、孫の妻インナさん（27）とひ孫のソフィアちゃん（7）、長男の娘ウラジスラワさん（17）の計4人で避難し、ポーランド経由で日本に向かうことを決めた。「きっと祖国は受け入れてくれるはず」。降



## 2度の戦争 振り回され

旗さんはそう信じた。5日にジトミルを出発し、車で国境に向かったが、途中、西部リビウで車が故障。国境周辺では大渋滞に巻き込まれた。ポーランドに着いたのは出発から3日後の8日だった。日本への帰国については、外務省が全面支援してくれた。降旗さんと家族は11日に日本の査証（ビザ）を取得。18日の直行便で帰国する予定だ。降旗さんは一時帰国をしたことはあるが、長期滞在は初めて。日本語をほとんど忘れてしまっており、新しい生活に不安はある一方、「楽しみにもしている」と話す。日本の印象は「人が親切で、街が清潔」だという。

一方、戦争の先行きは見通せない。インナさんとウラジスラワさんは家族をウクライナに残しており、彼らへの心配も尽きない。降旗さんも戦将来については決めかねている。きょうだいがいる日本に住み続けたという一方、戦争が終わったら、ウクライナの復興を手助けしたいという思いもある。「簡単には決められない」と言う。

降旗さんは少年時代、樺太でソ連人の子供に服を脱がされるなどのいじめを受けた。その後もソ連、そして後継国であるロシアに振り回されてきたが、取材に対し、直接的な非難は口にできなかった。降旗さん「私も若ければ、ウクライナのために戦うべきだったと思う」と語り、「第二の故郷」への強い思いをのぞかせた。

北海道旭川市に住む降旗さんの妹、畠山レイ子さん（70）は「ウクライナのニュースを毎日泣きながら見ていた。（降旗さんが）無事に日本に戻れると聞いて、本当にうれしい」と話した。樺太残留邦人の支援をしているNPO法人「日本サハリン協会」は、降旗さん家族の旅費や日本での生活費を支援する寄付を募っている。

【ワルシャワ三木幸治、パリ久野華代】



### 難民救援金募集

毎日新聞社と毎日新聞東京社会事業団は、紛争や災害、貧困などで苦しむ世界の人たちを支援する救援金を募集しています。ウクライナ難民を人道支援する国連救援機関などに送ります。郵便振替が現金書留でお寄せください。物品はお受けできません。紙面掲載で「匿名希望」の方はその旨を明記してください。〒100-8051（住所不要）毎日新聞東京社会事業団「海外難民救援金」係（郵便振替0012000076498）

在ポーランド日本大使館に到着した（左から）降旗英捷さん、孫の妻インナさん、ひ孫のソフィアちゃん、長男の娘ウラジスラワさん＝ワルシャワで10日、三木幸治撮影